

教授に就任して



教授就任にあたり

予防歯科学分野 教授 小川 祐 司

このたび、新潟大学歯学部予防歯科学分野の教授を拝命いたしました。堀井欣一教授、宮崎秀夫教授をはじめ多くの先輩諸兄が築いてこられた本講座は50年の歳月を迎えました。培ってきた伝統を大切にしながら時代の新たなニーズに即した講座運営が私に課せられた使命であると認識しております。同窓会誌でも就任にあたっての抱負を述べさせていただきましたが、改めて以下に趣意を記したく思います。

教育については、予防歯科学分野が日本で唯一のWHO（世界保健機関）口腔保健協力センターに認証されたのを機に、教育内容にWHOの口腔保健戦略をベースにした国際口腔保健を織り交ぜ、“Think globally, act locally”をコンセプトに国際的視野を持って最先端のエビデンスを選別・駆使でき、かつ論理的思考が行える人材の育成を大きな柱にしてきました。時代のニーズに即した口腔保健を国際的な視点で捉えられる礎を築くことにより、優れた歯科医療リーダーの素地を修得させることが目標です。科目としては、予防歯科学のみならず、国際歯科保健医療学入門、う蝕学、衛生学、統合科目、PBLにも参画し、基礎と臨床の橋渡しを担っております。臨床予備実習や臨床実習では、メンテナンスの手技を中心に適切なセルフケアの獲得と維持についてマンツーマンで指導を行い、集団に対する公衆衛生的な口腔保健の推進についても、母子保健や学校保健等を通じて演習形式による地域実習を実践しています。これらは地域社会に貢献する歯科医師と

して求められる知識・技術・態度の修得に大いに役立つ内容であると認識しており、新カリキュラム下においても培ったノウハウを最大限有効に活かし、すべての人が質の高い健康を享受できるような社会性に富んだ歯科医療リーダーの教育育成を目指して参ります。

大学院教育においては、専攻共通必修科目としてベーシック実践統計学を担当し、新入大学院生に対する研究デザインの構築から論文作成におけるデータ解析の指針について、演習を組み合わせた講義を開講してきました。外国人留学生には、英語によるチュートリアルを実施して、知識の構築のみならず研究全般におけるアドバイスも行っています。魅力ある大学院カリキュラムの充実に取り組む上では、海外で活躍する研究者を積極的に講師として迎え入れ、最新の知見や情報を修学できるようなコース内容がこれからの課題であると認識しております。選択必修コースでは、ベーシック国際口腔保健学コースを担当するとともに、国際口腔保健科学コースにおいて、国際的視野での基本的な口腔疾患の予防と健康増進の理論を習得させるべくWHO国際口腔保健をベースにした完全英語教育を行っています。本コースは他に類を見ないWHOでのエクスターンシップを必修と課しているほか、WHO協力センターネットワークを活用してアジア諸国における口腔保健調査研究活動をプログラムに組み込んでおり、実践的な国際口腔保健のフィールドトレーニングを可能にしています。「大学院教育の実質化」を基盤

に、WHO口腔保健協力センターの実績を取り入れながら、国際性のある研究者を輩出すべく大学院教育の質の担保を目指して参りたいと考えております。

研究については、予防歯科学分野が主導している「新潟高齢者スタディ」を通じて、高齢者の口腔健康に関連する要因を様々な角度から検証を試み、その学術アウトカムは、WHOの高齢者口腔保健施策のエビデンスにも位置づけられてきました。本スタディを通じて得られた知見は100本を超える論文や報告となっています。今後は健康長寿のメカニズムを解明する目的で、精神衛生、運動機能、生活習慣を多角的な観点からデータ取得・解析することが求められており、さらなるエビデンスの構築とともに施策に転換するトランスレーションを積極的に支援することによって、予防歯科学の調査研究力を社会的に高めることが重要であると認識しております。

また、学内外の他分野（施設）との共同研究についても内容の拡充が不可欠であり、WHO協力センターを中心とするグローバルネットワークの中では、国民、民族レベルでの疫学研究を通じて、う蝕・歯周疾患・口腔ガン等の罹患特性を明らかにし、ヘルスプロモーションを実践する上で生活習慣共通のリスクファクターアプローチが必要不可欠です。禁煙支援や栄養指導（砂糖摂取抑制）などを対象にした政策研究を進め、歯科から行うコモンリスクファクターアプローチを体系化し、その成果をエビデンスとして世界が共有して公衆

衛生向上に役立てていく流れを作って行きたいと思っております。

診療については、医歯学総合病院予防歯科において、患者様の生涯を通じた口腔内の健康保持増進に寄与するため、ライフステージに応じた口腔保健指導と口腔疾患予防処置・管理等を適切に行っていくことが命題です。う蝕予防を中心とした小児口腔健康管理、歯周病予防を中心とした成人口腔健康管理、そして喪失歯予防を目的とした高齢者口腔健康管理です。その対象は、口腔内に自覚症状がない健常者から口腔疾患治療が終了したメンテナンス患者までを含みます。メンテナンスは、治療によって得られた口腔内の健康な状態を持続させ、同時に再発を防止させる点で、歯科医療の中では必須の部分です。このメンテナンスの成果が患者様のQOL向上にどれほど貢献しているか、客観的に可視化できる評価指標を考案することが、予防歯科の果たす役割・意義をより明確化できるものと考えております。予防歯科を通じて質の高い医療を提供するとともに、患者様本位の安全で安心できる医療サービスの提供に力を尽くしたいと考えております。

以上、簡単ではありますが主な趣意を述べさせていただきました。大切なことは、これらを実実に成果に結びつけていくことであり、医局員ひとりひとりの力を大切にして、大きな力に繋げる努力を続けて参りたいと思っております。

皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



教授就任祝賀会にて

教授に就任して



教授就任のご挨拶

新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座 教授
吉羽 邦彦

2018（平成30）年10月1日付けで、口腔生命福祉学講座（口腔生命福祉学科）教授に就任いたしました、吉羽邦彦（よしばくにひこ）と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は1984年に新潟大学歯学部卒業後、歯科保存学第一教室（現在の口腔健康科学講座う蝕学分野）・岩久正明教授のもとに大学院生として入局いたしました。大学院生時代は、口腔解剖学第一教室（現在の顎顔面再建学講座硬組織形態学分野）・小澤英浩教授のご指導のもと、組織の石灰化機構の解明に取り組みました。大学院修了後、約半年間の佐渡・小木町立歯科診療所勤務を経て、1989年1月1日付けで、新潟大学歯学部附属病院・助手に採用されました。1995年11月から約1年間、歯の発生研究の第一人者であったルイ・パスツール大学医学部（フランス・ストラスブール）、Jean-Victor Ruch 教授のもとに留学する機会を得ました。そこでは歯の形成と細胞分化に重要な役割を果たしている細胞外マトリックスに関する研究に従事させて頂きました。その後、大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座う蝕学分野・助教、准教授を経て、現在に至っております。

さて、2004年に開設されました口腔生命福祉学科も、2019年3月には12期生を輩出します。本学科の卒業生は歯科診療所や病院歯科などの医療機関ばかりでなく、行政や介護・障害福祉施設など様々な分野で活躍しています。また現在、3名の卒業生が本学科の専任教員として学生指導にあたっております。私はこれまで主として歯学科学

生の教育、特に保存修復学（う蝕の治療、審美的修復処置）と歯内療法学（歯の神経や根の治療）に関する講義、基礎実習および臨床実習に携わってまいりました。一方、口腔生命福祉学科の学生に対しましては、3年次の「歯科診療補助」の授業の一部を担当するとともに、医歯学総合病院・歯の診療科外来において3、4年次の歯科衛生士臨床実習指導のお手伝いをさせて頂いております。「歯科診療補助」は歯科衛生士の3大業務（歯科予防処置、歯科診療補助、歯科保健指導）の一つで、その業務範囲は器具・材料の準備や診療介助から、歯周病患者の歯周組織検査や歯周初期治療、メンテナンスなど多岐にわたります。最近では歯科医療に対するニーズも多様化、高度化し、知識や技能を含めた高い専門性が診療補助に求められるようになってきています。私はこれから専任の教員として担当することになりますが、関連する教育プログラムの改良などを通して、より質の高い歯科衛生士の育成に努めてまいりたいと考えております。

超高齢社会を迎え、医療の現場では人口構成や疾病構造の変化への対応が求められています。「健康寿命の延伸」が国民的な要請となるなか、口腔の健康が全身の健康に強く関係することが明らかになりつつあります。残存歯数と認知機能との関連や、歯周病と糖尿病や循環器疾患などの非感染性疾患（生活習慣病）との関連性が示唆されており、高齢社会における様々な健康・医療問題の解決に向けて、歯科医療・口腔保健の重要性が

益々高まっています。このような状況のなか、口腔保健医療、口腔ケアの担い手としてその活躍が期待される歯科衛生士の養成教育を担う一教育者として、その責任の重さを改めて認識している次第です。「人生100年時代」を見据え、これからの歯科保健医療をリードするとともに、時代の潮流や社会の変化に柔軟に対応できる歯科衛生士の育成には、しっかりとした土台（基礎）作りが重要と考えております。これまでの歯学教育と臨床経験を生かし、少しでも貢献したいと考えておりますが、臨床教育には現場での臨床実習が欠かせません。医歯学総合病院をはじめ関連機関・施設の先生方ならびにスタッフの皆様には今後とも一層のご指導とご協力を賜りますよう、この場をお借りして改めましてお願い申し上げます。

健康長寿社会の実現のためには歯の保存と咬合機能の維持が益々重要となっています。永久歯の抜歯の主な原因は「歯周病」と「う蝕」ですが、中・高齢層では「破折」の割合が増加していることが報告されています。特に発症した多くが抜歯の適応となる垂直性歯根破折は歯髄を失った失活歯に多発しており、歯根破折の防止のために歯髄の保護・保存が重要と考えられています。私はこのような歯の保存、特に歯髄保存の重要性を踏まえ、「象牙質／歯髄複合体の修復と再生機構の解明」、および「歯髄保存・再生療法に有用な生体機能性材料の開発」に関する研究を主なテーマとして研究活動を進めてまいりました。新規生体機能性材料の創生と新たな歯髄保存療法、さらに

は歯髄・象牙質再生療法の開発を目指そうとするもので、歯の保存による口腔機能の維持、さらにはQOLの向上と健康長寿社会の実現に寄与できるものと考えております。

先の平成28年度歯科疾患実態調査によれば、80歳になっても20本以上自分の歯を持つ「8020」達成者は50%を超えました。これに対してう蝕は若年者で顕著に減少している一方で、65歳以上の高齢者では逆に増加傾向にあります。根面う蝕の増加が反映されているものと考えられており、「根面う蝕の予防・処置法の開発」が喫緊の課題となっています。根面う蝕は発症部位により切削や修復操作が困難な場合も少なくなく、特に口腔清掃の不十分な要介護者や高齢者、また口腔乾燥症患者などでは、根面う蝕が多発することが知られています。発生の予防や進行抑制処置として、現在、フッ化物やフッ化ジアンミン銀などの薬剤塗布が応用されていますが、これらの有効性に関するさらなる検証が必要と思われます。また、これまでの研究手法を応用・発展させ、根面う蝕の発生予防と進行抑制に対してより効果的、簡便な薬剤・材料の開発に関する研究も開始したいと考えているところです。

最後になりましたが、新潟大学歯学部ならびに口腔生命福祉学科の発展に微力ではありますが全力を尽くす所存です。皆様には今後とも一層のご支援とご指導を賜りますよう、よろしく申し上げます。

教授に就任して



教授に就任して

歯周診断・再建学分野 教授 多部田 康一

平成30年10月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科歯周診断・再建学分野教授に就任致しました多部田 康一（たべた こういち）と申します。私は27期生として新潟大学歯学部を平成9年に卒業致しました。東京に生まれ埼玉で育ち、高校は山梨県にある駿台甲府高校で寮生活を送りました。新潟大学に入学してからは28年が経ち、すっかりこの土地に愛着を持って生活しています。本学出身にて幾度か歯学部ニュースに自己紹介をしておりますので、主に歯学部在學生と保護者の皆さまに向けての自己紹介をさせていただきます。

私の大学生時代の教養課程はまだ2年間あり、のびのびと自由に過ごすことが可能な時代でした。テニス部に所属し、クラブ活動とアルバイト三昧の生活で模範的學生とは対極であり、多くの先生方に大変お世話になりました。学部卒業後はさらに4年も自分に勉強（研究）なんてできるのか？といった不安を持ちながらも、後悔しないようにできる経験をしてみたいという好奇心から大学院進学を選択しました。大学院入学後は、“頑張ろう”という気持ちに自然に転換しました。私はこれまで教員として働いてくる中で、多くの學生を見てきました。多少苦労しながらも頑張っただけで卒業し、国家試験に合格した後は、まるで別人のように立派な歯科医師になり、様々な分野で活躍してゆく人が沢山いました。歯学部では学ぶことがそのまま、自身の将来に結び付きます。努力家の優秀な學生は着実に力をつけてゆきますし、

そうでない人も意識を変えて頑張ればいつでも挽回できます。ただし、国家試験の合格率が低下している今の時代は昔と違うので、同じ努力なら早めの奮起が間違いなく得策です。そのような頑張りの中の選択肢の一つとして是非、学生時代の成績と関係なく大学院進学についても検討してほしいと考えています。大学院で研究を行うことで、考える習慣を身に付け、どのような背景をもって現在の歯科治療が行われているかを知ること、情報の氾濫の中で新しい知識や技術をいかに取捨選択し、自分の臨床に取り入れてゆくかという点でとても重要であり、質の高い医療を実践するために必ず役立ちます。そのうえでの多面からの努力により、時代や地域に合った多様な患者サービスの提供と、患者さんからの高い満足度と評価を得ることが可能となるでしょう。皆さんの新潟大学歯学部及び大学院での経験が、歯科医療従事者としての社会貢献につながればと考えています。

私は学部生時代に口腔外科か矯正科に進むことを心の中では考えていましたが、ライターの先生の勧誘をきっかけに、結果として、自分自身で聞いてないようにも思っていた当時の第2保存科（歯周病科）の大学院へ進学することとなりました。私が入局した当時、原 耕二先生が教授でいらした歯科保存学第2講座（現歯周診断・再建学分野）は、炎症性疾患としての歯周病の特性から、臨床教室としていち早く免疫・生物学的アプローチをもって研究に取り組んでおり、とてもアカデ

ミックな雰囲気には溢れていました。大学院の研究では、当時、講師でいらした山崎 和久先生（現口腔生命福祉学科教授）より、免疫学的研究手法を用いた歯周病の自己免疫疾患的側面や歯周病原細菌に対する自然免疫機構についての研究についてご指導を頂きました。研究には、主体的に学習しながら答えを求めてゆく作業が必要であり、学部学生の知識習得型の学習とは全く異なります。大学院進学前の不安は全く無用なもので、楽しく充実した4年間を過ごすことができました。大学院時代に関わった歯周病原細菌に対する自然免疫機構の研究テーマは、グラム陰性細菌細胞壁の構成成分であるリポポリサッカリド（LPS）に対する宿主側抗原認識レセプターとしてのToll like receptor の発見（1997年～1998年）に基づくものです。この発見をしたBruce Beutler M.D.の研究室（スクリプス研究所、米国）に、私は運よく留学する機会を得て、大学院卒業後の2005年から約3年間、ポスドクとして自然免疫の研究に従事しました。滞在した米国カリフォルニア州San Diegoは西海岸のメキシコとの国境付近に位置し、年中温暖な気候の風光明媚な都市です。裕福な米国人が多く住む比較的治安の良い都市ですが、安いお給料でぎりぎりの生活を送るポスドクであったため、楽しみも限られていました。しかしながら初めての海外生活での新しい経験や、異なる価値観を知ること、自分の興味に没頭する貴重な時間を得ることができました。学生の頃には全く想像もしなかった世界が広がり、今の自分を作る糧となる経験をしました。そのような中で、大学などのアカデミックで働くことを目指す考えがほぼ固まりました。昨年、2018年、新しいがん治療薬の開発に繋がったPD-1分子の発見について、京都大学の本庶佑先生がノーベル生理学・医学賞を受賞したことが話題となり、日本の医学研究の質の高さが改めて示されました。私の留学当時のボスであるDr. Beutler も、私が帰国した5年後の2011年に“Discoveries concerning the activation of innate immunity”（自然免疫活性誘導に関する一連の発見）についてノーベル生理学・医学賞を受賞しました。彼の受賞内容は、ゲノム配列がまだすべて決まっていなかった当

時、ミュータジェネシスという遺伝学的手法を免疫学に応用することで自然免疫に機能する新規の遺伝子群を発見したことが評価されています。私の研究成果もそのうちの一つであり、スタートしたばかりの未熟な研究者見習いでありながら、自然免疫研究全盛期に最先端の競争に参加し、その概要図を描く発見に寄与することができたことはとても幸運なことでした。帰国後5年を経て、師事したボスのノーベル賞受賞のニュースを聞いた時には心から喜びました。私が学生時代には存在しなかったそれらの新しい知見は、現在の医歯学系学生も学ぶ、学習内容の一つでもあります。大学院での研究生活から米国留学を経て、学生時代には想像もしなかった世界で、大切な友人を得ることもできました。こうして大学に残って働くことにならなかったとしても、この経験の価値は私にとって変わらないものです。

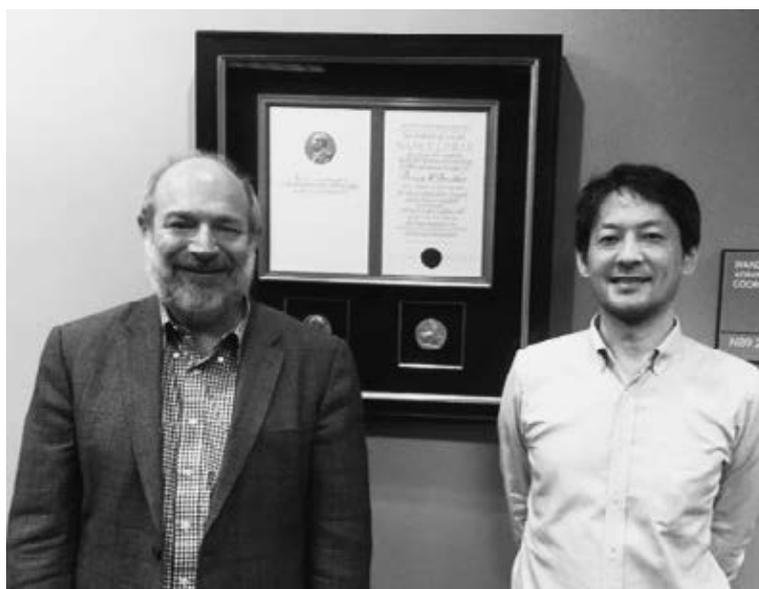
2005年の帰国後には、すぐに臨床実習を担当することとなり、教育・研究・臨床と多忙な時期が始まりました。その直後より臨床研修が義務化され、そこから十数年の間に社会の変化に大学が対応する努力を求められている時代と感じます。科学技術の進歩、経済環境や価値観の変化は、研究活動だけでなく人を相手にする教育や臨床とも密接に関連しています。臨床医として思考力のある、汎用力の高い人材育成のための授業や実習を行うために新潟大学歯学部の各分野の先生方が努力しています。私たち歯周診断・再建学分野においても同様です。歯周病学、歯周治療学はすべての歯科治療に関わるものであり、すべての学生に十分に理解をして卒業をして欲しいと考えています。解りやすくするために教科書には簡潔に記載される内容も、深く理解するといろいろな問題や矛盾があり、臨床現場においてそのまま当てはまらないこともあります。そのような点に疑問を持つ学生は必ずいます。そしてその疑問は正しく重要です。さらに深い理解が伴うことで、歯科治療において個々の異なる患者さんへの対応が可能となります。

歯周病学、歯周治療学では科学技術の進歩と情報の蓄積により、過去の知見（病因論）の修正や、治療方法の有効性についての再評価が続いていま

す。これは歴史の浅い歯周病学の発展における次の発展の前兆と考えられます。そのような点で歯周病学には予防・治療において明確な課題が残る未来のある分野と考えています。歯周病の罹患率は依然高いままです。歯周病の薬剤によるコントロールにおいては、薬剤耐性（AMR）が喫緊の問題になっており、歯周病の治療においても転換が必要です。歯周組織再生においては歯周組織の欠損を十分に補う方法が必要とされています。歯周病と全身疾患の関連が知られますが、歯科と内科の臨床現場をつなぐような共通する臨床マーカーが開発されれば、歯科医師がより積極的に国民の健康増進に役割を果たすことができます。そして歯を保存するための歯周病治療には原因除去とリスク因子の除去が重要ですが、リスク評価やリスク程度を反映する客観的指標が臨床現場には必要です。また、2017年には米国の歯周病学会のコンセンサスとして、侵襲性歯周炎（以前の若年性歯周炎）の診断が無くなりました。これからも科学技術の進歩とともに、教科書に記載されることや治療方法は間違いなく変化してゆくものと思われれます。大学・大学病院では現行最先端の歯周治療理論・技術を実践してゆくと同時に、歯周病学が発展して国民の利益になるよう努力をすることがとても大切です。

前述のように学生さんには情報の氾濫に惑わさ

れず、高い思考力をもって真の実力をつけて欲しいと考えています。私の恩師である前任教授の吉江弘正先生は歯周病に限らず、一つの専門領域を起点にしっかり思考し、臨床スキルを高めたのち、さらに幅広く多領域の臨床スキルを高めてゆくことは効率の良い方法であると学生さんに向けてお話しをされていました。これについては私もまったく同様に考えます。目標、やりがい、生きがいのような言葉で表現されるかわかりませんが、皆さんが目指すもの、大切なものを得るために、より一歩踏み出してチャレンジして欲しいと考えています。そのような環境を与えることができる分野が基礎・臨床問わず新潟大学歯学部にはたくさんあります。母校にそれがあつたことはとても恵まれたことであることは認識してほしいと思います。そのうえで、学外に良い勤務先を見つけて研鑽することもよしです。焦ることなく近視眼的にならずに進んでください。歯周診断・再建学分野（歯周病科）も専門としての歯周病学の発展への努力とともに教育・研究・臨床の歯車を回して活動しています。学生さんとは講義・基礎実習、臨床実習、卒後研修等に関わることを楽しみにしています。さらに一緒に歯周病の研究・臨床を行ってゆく新しい仲間に出会えることを願っています。興味があつたら遠慮せず声をかけてください。どうぞよろしくお願い致します。



ノーベル生理学・医学賞メダルの前でDr. Bruce Beutlerと
(2017年, UT Southwestern Medical Center, Dallas, Texas)